

山本恵理 ピアニスト／コンポーザー

大阪府出身。3歳よりピアノを始め、8歳から独学で作曲を始める。高等学校音楽科ではピアノに加え、声楽、ビオラ、作曲等幅広く学び、大学（作曲専攻）に至るまで、数多くのコンサートを行う。

1995年大学院在学中、ニューヨークでトミー・フラナガンの演奏に感銘を受け、ジャズに傾倒。同年、ニューヨークに渡る。ベーシスト、レジー・ワークマンの勧めでニューヨーク大学ジャズ科に入学。ジュニア・マンス、リアン・レジウッド、アンドリュー・シリル、レジー・ワークマンなどに師事。在学中より演奏活動を開始し、JVC Jazz Festival、Smalls、Lenox Lounge等に出演。1999年、自らのトリオでイーストヴィレッジの“Avenue B Social Club”での、レギュラーコンサートを始める。そこで、マシュー・シップを含む様々なミュージシャンと親交を深める。

2000年からは、グリニッジヴィレッジに位置する歴史あるジャズクラブ“Arthur’s Tavern”に自己のトリオ（デイヴィッド・アンブロジーオ；ベース、竹内郁夫；ドラムス）でレギュラー出演、現在に至る。ピアノトリオが10年ものロングランで、ニューヨークのジャズクラブにレギュラー出演しているのは大変貴重である。その独創的なサウンド、曲にはアメリカ国内外でも評価が高く、ASCAP（アメリカ作曲家協会）からは、2006年から4年連続で作曲賞を受賞している。

近年ではアメリカ国内での Hartford Jazz Festival、Lincoln Center、Blue Note等数多くの出演、そして日本全国での定期的なツアーに加え、イタリア、イギリス、ウェールズ、スペイン、ドイツ、イタリア、アイルランド、カナダ等でも頻繁にツアーを行う。イギリスの Cheltenham Jazz Festival、スペインの Terrassa Jazz Festival、イタリアの Time Zone Jazz Festival、アイルランドの Bray/Derry Jazz Festivalをはじめとするメジャーなフェスティバルに出演している。

2008年にはトリオアルバム“Redwoods”と、4人のミュージシャンをフィーチャーした初デュオアルバム“Duologue”をリリース。“Redwoods”はアメリカの Epoch Times Newspaperに“2008年にリリースされたジャズCDのトップ10”に、“Duologue”は WNYC（ニューヨークラジオ）のジャズ番組のパーソナリティーでもあるジャズ評論家ウィル・レイマンによって、“2008年のトップ15”に選ばれる。また、同年11月には、初のソロピアノツアーをミラノ、フィレンツェ、ローマ等イタリア8都市にて行い、好評を博す。

2010年にはトリオ6枚目のニューアルバム“In Each Day, Something Good”をリリース。アルバム中5曲は、小津安次郎監督の1932年の無声映画、“生れてはみたけれど”にインスピレーションを得て作曲した組曲である。イタリア、ドイツ等のフェスティバルでは映像とともに演奏し、絶賛を受ける。

自己のトリオ、ソロでの活動に加え、ウィリアム・パーカー、ダニエル・カーター、ウィット・ディッキー、ロン・マクルーアー、ハミッド・ドレイク、ブッチ・モリス等、様々なミュージシャンとも共演。特にベーシスト、ウィリアム・パーカーのアルバム“Luc’s Lantern”と“Corn Meal Dance”での演奏は、国内外で高い評価を受ける。彼のトリオ、セクステットのメンバーとしてアメリカ、イタリア、オランダ、ノルウェー、チェルニジア、ポルトガルをはじめとする数多くのツアーにも参加している。

また、2009年には滋賀大学大学院にて音楽教育／作曲の修士課程を修了。演奏活動に加えアメリカ、日本、ヨーロッパ、アフリカ等でジャズワークショップ、マスタークラスを積極的に行っている。

<http://eriyamamoto.com>

eri@eriyamamoto.com